
監獄

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

監獄

【Nコード】

N7499A

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

首を切り付けられて意識を失った俺が意識を取り戻した時、監獄の様な場所に居た。俺は推理を廻らせ、脱出を図る。

（前書き）

推理にするかホラーにするかコメディにするか、最後まで迷いました。

そういう感じの短編です。

目の前に女。

刃物を持っている。

それは、俺の首めがけて振り下ろされる。

痛み。

自分の血しぶきというものを初めて見た。

体から秒刻みで力が抜けていくのが解る。

霞みゆく視界が最期に捉えたものは……、

俺の血で紅く染まったデスクトップのPC一式だった……。

……、
……、
……、
箒なんだが
……？

なんだか、まだ意識は有るらしい。

個人的には頸動脈切断による出血性ショックで即死したと思ってたんだが????

状況はよく解らないが、とにかく狭い。
そして、暗い。

何処かに拉致されているのだろうか。

鬱蒼と木木が生い茂る樹海の中、或いは、この木なんの木気になる木の下の木洩れ日の様な、申し訳程度の明かりは洩れている。

《狭えよ！

暗えよ！

こっから出てえよ！

っていうか、閉じ込めた奴、出しに来いよ！》

監禁場所の様子を探ろうにも、目視可能な範囲が狭く、目による認識は難しそうだ。

やむなく直感と耳により認識することに決める。

耳を澄ますと、まずは人々の喧騒。

なんだ？

こんなに大勢人が居るのに誰も俺に気が付かないのか？

《馬鹿な……》

不吉な思考が脳裏をよぎる。

俺は死んだ。

霊体となった俺は、余りのショックに視力を失ったままあの世へ……

《んなあほな……》

その読みはたちどころに完全否定される。
空間自体が狭いことは確かだし、俺はしっかりと認識しているのだ。
この空間にも《明かりが射している》ことをこの《目》で。

生死は別としても、俺の視力は正常だ。

それにもしここが【あの世の入口】とやらなら、こんな人だから
できているのは、明らかに閻魔大王の職務怠慢である。

更に言うなら、天国か地獄かの運命の分かれ道であろうこの場所が、
これほど和気あいあいとしている訳がない。

言ってみれば、自己の存亡をかけた修羅場なのだから。

俺が今すぐにすべきこと、それは、ここがどこなのかを特定し、こ
こから出る方法を見つけること。

このふたつに尽きる。

少しでもヒントを得ようと、聞耳を立てる。

「わあー、なにこれ、マジ安くない!？」

《なんだ、なんだ、なんだあゝ!?!?!?》

突然の闖入者に、心の底から驚いた。

だが、その言葉は間違い無く、俺に向けて発せられていた。

《失礼なネエちゃんだな……。

俺に値札は付いてね……》

言い終わる刹那だった。

震度100、マグニチュード10000レベルの（そんな数値は無

い）縦揺れと横揺れが一緒になったって襲って来たのは！

《えべべべべしい！？！？！？！？》

一体なんだ。

まるで北斗神拳を喰らったモヒカン野郎みたいなこと言っちゃったぞ？

大震災が収まる。

そして先刻の若い女性の声。

「すいませーん！」

「これ下さーい！」

《だから俺に値札はねえって……》

「19800円になります」

!!
!
!
!
!
!
!
!

いちまんきゅうせんはつぴゃくえん！？

なに、俺ってそんなに安っぽいの……！？》

決してそれは俺に付けられた値段ではないと信じたかったが……、シヨックだった。

《それにしたってイチキュッパばばばびびばばば！?!?!?》

今、この空間は、予震の真っ最中だ。

或いはこれが本震なのかもしれない。

そこには、相変わらず

《びばばぶばばばびびびー!!》

と、経絡秘孔を突かれ、破裂寸前になっているかのような俺が居る。それと同時に、この狭い空間の中でこれほど激しく揺れているにも関わらず、全く痛みを感じていない俺も居た。

《ほほばびびいほほ？

ばばぶべべぽぽばびばぶぶべへふば？》

まだ地震は収まらない。

当然俺も破裂寸前なままだ。

ケンシロウのうろたえる顔が目に見える。

どうやら聖帝サウザー並に俺には北斗神拳がきかないらしい。

……、戯れ言はさておき、結論は一つしかなさそうだ。

俺は……、死んだ。

そして、どうやら《19800円》のなんがしかに取り憑いてしまっているようだ。監禁(?)場所が若い女性の家に引き取られていく。

ほぼ視界の利かない世界で若い女性と同じ屋根の下……。

盗聴し放題。

それはそれで良いような気がした……。

「さあて、レポート上げますかあ」

女性は帰るなり宿題を始める。

カタカタカタ……、
カタカタカタ……。

近くにキーを叩く音が聞こえる。
かなり近くだ。

ほぼ間違い無く俺の監獄は周辺機器のようだ。
本体ではない。
狭すぎる。

そして、暗すぎる。

キーではない。
遠すぎる。

そして、マウスも却下だ。
明るすぎる。

残るは……。

《ドライブかプリンターだな》

「さあて、上げるかあ！」

ギシギシと椅子を軋ませながら女性が言う。

？

さっきから上げてなかったか？

突然明かりの一部が消え失せた。

それと同時に監獄内に侵入者が！

それは、厚さコンマ5ミリ程のツルツルした軟らかい物の束。

《紙だ！

プリンターだったんだ！》

ようやく監獄の種類は特定できた。

あとは脱獄を果たすのみだ。

……、と、突然紙が激流となって襲い掛ってきた。

空間も慌ただしく動き始める。

《うわあー！！！

洪水だあ！！

助けてくれえ！！！！》

おそらくはただ単に、レポートをプリントアウトしているだけなのだろうが、俺にとつては天地が引っくり返る程の天変地異だ。

いま、必死になって何かの部品にしがみついているぞ？

だが、ちよつと考えてみた。

入ってきた紙に機械内で印字したものを外に出す。

そう、紙を《外から入れて》印字したものを《外に出す》のだ。

《これって流れに身を任せれば、ここから出れるんじゃないのか！
？》

そうなのだ。日本の川は大海原に流れているのだ。

俺は紙（神）の川に全てを託した。

門倉麻里愛^{かどくら まりあ}は大学一年生だ。

心理学部で犯罪心理学をアイドルタレントを本業としながら学んでいる。

今回のレポートは、三日前に佐野勇氣^{さの ゆうき}という男性が首を切られて殺害された事件のプロファイリングだった。

レポートを仕上げ、買ったばかりのプリンターでプリントアウトする。

微妙に赤黒い染みが付いているところは気になるが、とにかく、性能の割に安かったのだ。

安い商品は貧乏学生の味方なのだ。

ウーン……、ウーン……。

レポートがプリントアウトされた紙が機械から吐き出される。

最後の一枚が出てきた。

だが……………。

プリンターは止まらない。

《？

何なの？》

プリンターは事前のセットを無視して新たな印刷物を吐き出す。
それには、血にまみれた右手がプリントされていた……。

「いいやあああ……！」

麻里愛はうろたえた。

悪魔のプリンターはなおも紙を吐き出す。

ジジジ、ウーン、ウーン。

新たなる悪夢。

そこには左手。

ウーンウーンウーンウーン……。

「た……、

たすけて、たすけて、祟られる！
殺されるう……！」

彼女の悲鳴は、アパートを借りる際、不動産屋がアピールしていた
完全防音に掻き消された。

「ひいいいいえあああ!!!!!!」

最早発狂寸前まで追い込まれていた。

《なんだ、なに泣き喚いてんだ？

俺、そんな怖え出かたしてるのか？》

折角出れるのに電源を切られたら堪らない。
下手すると壊される可能性もある。

《冗談じゃねえぞ》

何とか阻止する手はないか？

麻里愛はただ見つめるだけだった。

「ああああああ……」

声も出ない。

だが、彼女の中の何かが、それを全て出させてはいけなさと訴えかけている。

「壊す！！」

走つた。

時折もつれ、時折転びながら。
そして、左手にハンマー。

『叩き壊してやる』

麻里愛は勇気を振り絞って悪魔を吐き出すプリンターを見据える。

そこには、プリントアウトされた紙が三枚増えていた。見たくもなかったが、見えてしまった表側。

そこには血文字の様な柄で、こう書かれてある。

《僕は佐野勇気と言いますm (_ _) m

どういう経緯からかは解りかねますが、コノプリンターに閉じ込められてしまったようです（TOT）僕、ずっとこんなとこ居るの嫌なんです（　　）

ただ、出たいだけです（TOT）

約束します！

あなた、いや、他の誰にもなにもしません！

絶対に約束します！

だから、どうか電源を切らないで下さいm (_ _) m

プリンターを壊さないで下さい m () m

助けてくれれば、僕はあなたにこの身を捧げます！

だからお願いしますm(´▽`)m m(´▽`)m m(´▽`)m

顔文字まで駆使して必死に彼女の恐怖心を和らげようとする努力が伺える文面だった。

くすくす……。

幽霊らしからぬ行いに思わず笑ってしまった。
血で書かれた顔文字。

これもまた、不気味ではあったが笑えた。
そして麻里愛獄長は、勇気の脱獄を見逃す覚悟をきめる。

「あつ、どうも。

さの ゆうき
佐野勇気つす。

出してくれてありがとうございます。

いや、ホント助かりました。プリンターの中ときたら狭いの暗いの

……」

「あの、あたし門倉麻里愛」

長くなりそうだったため、割って自己紹介する。

「約束通り、私のために働いてもらっわね」

勇気はあんな約束しなきゃ良かったと、今更後悔した。

（後書き）

酷評、辛評、随時受付中です。

皆さん、このド素人を鍛えてやって下さいm（
—
—
）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7499a/>

監獄

2010年12月30日22時24分発行